

学部長権限特別研究報告書

ソーシャル・インクルージョンに関する研究
ドメスティック・バイオレンスを受けた学生に対するナラティブ・アプローチを通して

提出日 3月17日
社会福祉学科 講師 松平千佳

ソーシャル・インクルージョンに関する研究
ドメスティック・バイオレンスを受けた学生に対するナラティブ・アプローチを通して
社会福祉学科 講師 松平千佳

(1) ソーシャル・インクルージョン（社会的内包）とは何か？

1980年代中ごろより、英国の社会福祉政策を立てる際の理念となる言葉として使われ始める。ソーシャル・インクルージョンとは社会的に孤立しやすかったり、社会的に排除される可能性のある人々を、社会的なつながりの中に内包し、社会の構成員として支えあうことを意味する言葉である。

英国では1997年に首相直轄の部署としてソーシャル・インクルージョン部が設置された。この部では、社会的疎外と内包をキーワードに社会福祉政策の見直しをおこなっている。現在進んでいるプロジェクトの1例を挙げると、知的な障害を持つ成人に対するサービスの向上を目指すもの、あるいは、16歳から25歳までの労働していない若い成人層をターゲットにした研究やプログラム作りが進んでいる。この英国ソーシャル・インクルージョン部では、ソーシャル・エクスクルージョン（社会的疎外）を次のように説明している。

ソーシャル・エクスクルージョン（社会的疎外）とは？

ソーシャル・エクスクルージョン（社会的疎外）とは、単なる経済的な貧困の問題ではありません。

ソーシャル・エクスクルージョンとは、失業、差別、低い技術力、貧しい住宅環境、高い犯罪率、不健康や家族の崩壊など深刻な問題を個人あるいは一つの地域が経験することからはじまります。これらの深刻な問題が複数組み合わせると問題の再生産という悪循環が生まれます。

ソーシャル・エクスクルージョンは、一人の人間がその人生の中で直面する問題の結果、生まれる可能性があります。しかし、生まれた瞬間からソーシャル・エクスクルージョンが始まる可能性もあるのです。貧困状態の中に生まれたり、就労技術や社会生活を送る上での知識が低い両親の元で生まれることは、その子どもの将来を決定づける機会（チャンス）に対し、この時代においてもいまだなお大きな影響を与える要因なのです。

（英国ソーシャル・インクルージョン部による定義）

日本においても、2000年の12月、厚生省社会・援護局による「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」の報告書において、新たな福祉課題に対応するための方法を導く理念として位置づけられた。

(2) ソーシャル・エクスクルージョンをうけやすい人々

社会的に疎外される状態に陥りやすい人は、障害者、高齢者、児童、移民、あるいはホームレスや貧困層、また未婚の母親などといわれているが、今回の研究ではそれに加え、そしてDV被害者とその子どもを入れて考えたい。では、なぜDV被害者とその子どもがソーシャル・エクスクルージョン（社会的疎外）の状態になりやすいと考えるのかを次に示す。

DV 被害者とその子どもがソーシャル・エクスクルージョンの状態になりやすいと考える理由

- ①身体的・性的・心理的・経済的な暴力の元で生活するという状態 ⇒社会的に疎外されている状態
- ②DV 被害者は、行動の制限や管理を受けていることが多い ⇒社会から物理的に孤立する
- ③DV は児童虐待や高齢者虐待に比べてもっとも長く続く暴力の形 ⇒ 7年以上続くケースが全体の約50% ⇒長期間、犯罪行為である DV を受けながら生活することにより ⇒さまざまな障害が残る（自信の喪失など） ⇒社会生活を営む上で多くの問題が生じる
- ④DV は児童虐待と深い関連がある ⇒ 約7割の DV ケースにおいて子供もまた虐待を受けている ⇒また、子どもに対して直接的な暴力はなくとも父親が母親に対し DV をおこなっている状態を見て育つことが児童虐待である ⇒DV がサイクル化する可能性が大きい

(3) DV に関する基礎知識

配偶者や恋人からの被害経験を聞いたところ、「身体に対する暴行を受けた」は女性 15.5%、男性 8.1%、「恐怖を感じるような脅迫を受けた」は女性 5.6%、男性 1.8%、「性的な行為を強要された」は女性 9.0%、男性 1.3%が『あった』と回答した。身体的暴行、心理的脅迫、性的強要のいずれかをこれまでに 1 度でも受けたことのある人は、女性 19.1%、男性 9.3%で、女性の約5人に1人となっている。この1年間では、女性の 3.6%が身体的暴行を受けており、配偶者暴力防止法施行後も依然として被害が深刻であることが浮き彫りとなっている。(内閣府男女共同参画局 平成 14 年度「配偶者等からの暴力に関する調査」より)

5 人に一人が DV を経験する時代
静岡県立大学短期大学部には 492 人の女子学生が・・・
単純に計算したら、約 100 人の女子学生がすでに
DV を経験していたり将来経験することに・・・
DV を見て育った学生と自ら DV を経験した女子学生 12 名の語り・・・

(4) DV を受けた学生、DV を見て育った学生に対するナラティブ・アプローチ

DV 被害者や DV を見て育った者に共通して言えることは、この経験を恥ずかしいものとしてとらえていることである。そのような被害者エンパワーメントするためには何よりも本人の「語り」を促し、その語りを通して本人が経験したくないようにせいで

① 父親が母親に暴力を振るう場面を回想した学生の語り

○食事中に父親が母親に手を上げた。弟は私の横で泣き叫んだ。兄は歯を食いしばって我慢していたが、眼には涙があふれていた。私は涙がぼろぼろこぼれた。声は出さなかった。あまりにも怖くて。何度もけられたり殴られているのに母をかばえなかった。かばってあげたかったのに。そんな自分が嫌いだ！忘れていたつもりだったのに思い出した。もう忘れたい。

○聞こえてくるのは、父が母を怒る声、壁に当たる音、母の泣く声だった。そしてその中でも、今でも耳に残るのは、父が母に対する暴力の悲しくて、いびつな音だ。

② DV を見て育った影響について：自らの語り

○私たち兄弟三人は、いつも二階の部屋でビクビクしていました。父は、私を蹴ったけど弟に

はしなかったの、それがせめてもの救いでした。

○記憶を辿ってみても、幼い頃の記憶そのものが残っていないというか、あまり思い出すことができないんです。

○自分が自分で信じられないというか、無性に不安な気持ちになることがあります。

○家族がばらばらになる、いつもそんな不安を抱えていたことを思い出します。

○父の言うことに、少しでも反抗すると、暴力を振るわれたり、ものを投げつけられたり、最終的には、「生活費を出さない。」「学費は一切払わない。」「家から出て行きなさい。」と言われるので、最近ではもう反抗しないし、友達からはよく無気力だねって言われます。

○そのことがあってから、私は、父がまた母に暴力を振るうのではないかと、いつも父の機嫌や顔色を伺って、幼いながらに非常に気を遣っていた。

○他の子が考えなくていいことまで幼いながらに考えて、母を助けたいけれど今の自分には何もできない、という葛藤がものすごくあった。

○言い返したいのに言えないというジレンマは自分や父への嫌悪に変わった。父は大嫌いです。

○そのとき私は、本当に父という人間が情けなくて情けなくて仕方なかった。悔しくて悔しくて。「はらわたが煮えくり返る」というのを初めて経験した。

○母は父や祖母たちから受けたひどい扱いを私に話すことがあったんです。私にしかいえないのだから聞かなくっちゃという思いと、聞きたくないという思いが混在していました。でも誰にもいえないつらさというのはよく分かっていたから、いつも歯を食いしばって涙がこぼれないようにして聞きました。話を聞いた後はいつも気分が悪かった。吐き気がした。

③ 学生自身が DV 被害にあっている場合：どのような DV を受けているのか

○ 身体的な暴力の経験

初めは、抵抗し私も蹴り返したりしました。でも、このようなことをしていても、何も解決しないし、お互いを傷つけあうだけだと思い、暴力を受けても何もしなくなりました。彼はそれが気に食わないのか、暴力がエスカレートしました。傘で殴られ、傘が折れたこともあるし、腕をつかまれ引っ張りまわされ、腕はアザだらけになり、夏で暑かったのに長袖を着て学校に行ってたんです。

○ 行動の制限の経験

愛する人が自分にしていることが暴力なんかじゃないと思う人もいるでしょう。私もその一人だったのかな。交際を続けた2年間、彼が直接私に手を上げることは片手で済むほどですが、私が少しでも次に起こす行動を彼に告げず5分ほどいなくなるものなら、例えいなくなるころを見ている、声を張り上げ怒り、壁を蹴りつけ、謝ってもおさまらなかつたりする。物に当たり、壊すという行動を取るんです。

○ 脅迫（家族に対するものも含む）の経験

休みの日や放課後は常に彼と一緒に、私だって仲の良い友達と遊びたいのに、それを口にすればいつものように暴力が始まるのです。私は何度も別れを口にしました。でもその度に彼の脅迫が始まるんです。お互い家が近いので、「別れたら家を燃やす」という言葉も絶対に実行しないという保障もないし、彼は私にだけでなく、私の家族を苦しめようとするので、私の思いつきだけの行動は避けなくっちゃと思っていました。

④ DVを受けた学生自身がその経験を振りかえっての語り

○私は、ドメスティック・バイオレンスの経験がある。でも今まで自分のこととは全く無関係のことだと思い続けていた。自分の中で、ドメスティック・バイオレンスの経験の一人であることを認識できなかったからです。

○私は高校生のとき DV に遭いました。先生意外には誰にも言いません。耐えて耐えてやっと別れました。私は今でも T 君と付き合ったことは最大の親不孝だと思っています。思い出すと後悔ばかりです。

○彼氏は私が立てないように、ひざやすねのあたりを蹴ってきたんです。そして私の上に馬乗りになり首を絞めました。私は、そのとき初めて殺されると実感したし、とても怖かったのを今でも昨日の日のように生々しく、はっきりと覚えています。そして私の中でも「殺意」がはっきり芽生えたんです。彼も怖いし自分自身も怖かった・・・

⑤「DVの原因について、考えることある?」「他の知らないみんなに言いたい事ある?」という問いかけに対する語り

○でもね先生、DVを受けている女性は心の中では常に誰かに助けを求めていると思う。

○ひどい例だけがドメスティック・バイオレンスじゃなくって、日常的に存在しているもので、当事者すら暴力であることに無自覚のまま行われていて、知らず知らずのうちに被害に遭っている人が、毎日の生活の中で生きづらさを感じているんですよね。

○特別なことではなくって、すごく日常的で、身近に存在するものだというのをみんなは知るべきだと思う。でも私もこの授業を受けていなかったら、何も知らないままだった。

○知識がないということは、とても恐ろしいことだと思う。どんなことがドメスティック・バイオレンスなのかを知ることが、大切なのだと思う。

○小さな頃から DV を受ける母の姿を見てきた私は、絶対にそんな風になりたくないと思ってきた。でもそんなお母さんに似てきているような気がするんです。彼に対する自分の言動をふと思い返してみると、確かに相手が自分でできることまでやってあげているような気がする。そう思った瞬間、自分が嫌になりました。私にも暴力をされる特徴があるのかと思ってぞっとした。DV って循環するって言いますよね。

○依存している自分っていると、いつかはドメスティック・バイオレンスの被害者となると思う。若い子には専業主婦願望なんて抱かないでほしい。全部で依存していると、暴力を受けてい

る自分をおかしいと思いながらも耐えている自分になってしまう。どんなことがあっても、どんな人に出会っても、自分をすべて依存させてしまうことは、とても恐ろしいことだということを女の子には分かってほしい。

○DV を行う人は、それに気づくことすらできていない、または気づいていても正すことができない人だと思う。暴力を肯定的に考え、女性や子どもは未熟である、自分と違う意見を持つものは馬鹿であるという自己中心的な考え、そういう誤った考えで思考が構成されている人間なんだろうと思う。価値観を変えない限り繰り返すと思う。

(5) まとめに変えて

今回の研究を通して、DV を未然に防ぐための取り組みと DV を受けた若い世代（18 歳～25 歳程度）に対する援助の必要性が存在することを強く感じた。その一環として、DV 被害者となった学生たちに対する援助や支援を大学で取り組んでいくことの重要性について認識しなければならないと考える。

DV 被害者である学生、また DV を見て育った学生たちに必要な第 1 の支援は、学ぶ場の提供である。「語り」と「聞き取り」を通して分かったことの一つに、学生たちは学習するまで、自分自身が受けてきた暴力が DV にあてはまることに気付かないケースが多い。DV 被害者である学生たちが自らの経験を整理するために、また DV 被害者となることを未然に防ぐために、DV に関する知識をもつことが何よりも重要である。また大学側にはジェンダー・センシティブな取り組みが必要である。

「恥ずかしい」「人には言えない」経験であると感じている DV 被害者である学生たちにとって、自らの経験を「語る」ことはエンパワーメントにつながるということが今回の研究を通して分かった。エンパワーメントを通して彼女たちが自らの権利擁護意識を高め、またその経験を同じ被害を受けた女性や、被害を未然に防ぐための取り組みなどにつなげることができればと考える。そのような活動は、DV 被害者である学生や、DV を見て育った学生たちが社会的疎外される状況を防ぐことになると考える。